

トピックス

2020年度のトビイロウンカの発生と今年度の対策

昨年のトビイロウンカの多発は、海外から多数の飛来があったことが主な原因であった。本田においては防除手段が限られており、適切な防除の実施が困難であったことが被害を助長したと考えられる。今年の発生状況に注意するとともに、臨機応変な対応ができるように備えておくことが望ましい。

内 容

昨年は西日本を中心にトビイロウンカが多発し、被害が大きな問題となった。本種は梅雨前線に伴う気流によって、中国大陸から飛来するが、昨年は梅雨前線の活動が活発であったため、九州から東海にかけての広い範囲で例年より多くの飛来があった(図)。本県においては、6月下旬に本田で初めて飛来虫が確認され、7月上旬～中旬にかけては本田と予察灯でそれぞれ飛来が確認できた。

8月中旬に実施した調査では飛来次世代虫の発生がみられ、発生圃場率は77%と広い範囲で発生が確認された。発生虫の半数以上が産卵数の多い短翅型メスで、その後増殖が進むことが予想されたので、8月27日付で発生予察注意報を発表した。

9月上旬には発生圃場率が100%に達し、37.1%の圃場で要防除密度(株当たり成虫・幼虫が5頭以上)を超える事態となった。広い範囲で坪枯れが発生する恐れがあったため、9月16日付で発生予察警報を発表し、緊急防除を促した。

坪枯れの発生は、9月中旬頃から見られ始め、

収穫時期が10月以降になる品種では特に被害が拡大した。坪枯れの発生圃場率は西播磨地域で最も高く52.8%であった。

本種の飛来があった6月下旬～7月上中旬は、多くの水田で箱処理剤の残効が低下している時期であり、その後の本田での増殖が進んだと考えられる。また、本田における防除は、無人ヘリコプターが利用されている場合が多く、本種が棲息する株元(写真)に薬剤が到達しにくいことから、十分な防除効果が得られなかった可能性がある。

普及上の注意事項

トビイロウンカの飛来状況は毎年異なる。また、水田内における発生は偏りがあるため、発生初期においては状況の把握が難しい。最新の発生状況に関しては、病虫害防除所が定期的に発表する情報も参考にする。また、本田防除を実施する際には、本種が棲息する株元に薬剤が十分届くように施用することが重要である。

中西 智哉(病虫害部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-1222)

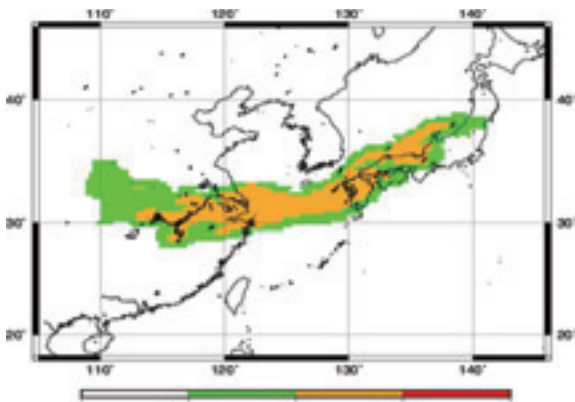


図 ウンカ類飛来予測図(下層ジェット気流(令和2年7月8日4時)から解析)JPP-NET ウンカ類飛来予測システムから引用



写真 株元に棲息するトビイロウンカ